



ピーターハウス

学長 大橋 秀雄

今年の3月初旬、国際科学連合の能力開発委員会に出席するためイギリスのケンブリッジを訪問しました。この会議のホストを務めるトーマス卿の肩書きは、ピーターハウス (Peterhouse) の主人 (Master) となっており、会議はそのピーターハウスで行われました。お恥ずかしい限りですが、私はピーターハウスについて全く予備知識が無く、名前から察するにケンブリッジ大学の合宿施設か学生寮のようなものと想像していました。

会議が始まる朝ピーターハウスにたどり着くと、守衛がうやうやしくトーマス卿の執務室まで案内してくれました。私はそこでようやく事態の全貌を理解し始めました。ピーターハウスは、ケンブリッジ大学を構成する31のカレッジの一つであるばかりでなく、1284年開学の最古のカレッジでした。今でも残っている13世紀以来の建物を中心に、17世紀頃までに建て増された教会、教室、学寮が中庭の芝生を取り囲んで整然と並び、まるで中世に紛れ込んだと錯覚するほどでした。

そのひっそりとした静けさの中で、学生とドンと呼ばれる先生達が勉学にいそしんでいました。

前置きが長すぎましたが、これからが本題です。このピーターハウスでは、毎年学部380人、大学院70人の新入生を新たに加え、全員がカレッジ内で寝食を共にしながら、勉強からマナーに至るまで先生から個別に指導を受ける全人教育が行われています。我が工学院大学も、きめ細かな教育を標榜して、後援会と密接な協力を保ちながら、学生一人一人に眼が行き届くよう努力して参りました。ピーターハウスと工学院大学では、学生数からしても全く事情が異なっていますが、そこでは昔ながらの人間形成教育が頑固に守られていることを知って感銘を受けました。

今までの大学教育は、あまりにも知識教育に偏したきらいがあります。健全な人間形成も、大学生活のもう一つの重要な課題であるはずですが。今回のピーターハウス訪問は、このことを改めて思い直す貴重な機会となりました。